

専修大学
創立130年
記念企画
第05回

日本を変える、 世界を動かす！ 社会知性の チカラ

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

ボーダレス社会を、国際人として生きる
国境を超えて活躍する
各分野の専修人たち

一三〇年前、若き四人の創立者たちが海を越え、法律や経済の専門知識を日本に持ち帰った。そのフロンティア精神を、現代に受け継ぐ一〇人の卒業生を追う。
グローバル社会を生きる彼らが、専修大学で得たものと今に生かされていることは？

学生時代に抱いた志を忘れずに、
誰もやっていないことをやりたい

商経学部（現・経済学部）入学後は、栃木から神田校舎まで、東北本線で片道二時間かけて通学しました。スポーツ観戦が好きだったこともあり、車中ではスポーツ新聞を読んで時間をつぶすことが多かったです。

当時の専大は野球、卓球をはじめスポーツが強く、クラスにもスター選手がいました。そんなことから、自分もメディアにぎわせたい、そのためにはライターになってなにかを発信、発表していききたいと、志すようになりました。

手始めは、専大生時代から始めた新聞や雑誌への投稿でした。得意分野の野球では、「東京六大

学に神宮球場の使用優先権があり、東都リーグは常に日程のシワ寄せが起きることから『東都専用球場の設置を急げ』といった趣旨で、読者欄などに数十回、記事が掲載されました。

二十数年のサラリーマン生活を経て、デビュー

とはいえ、卒業後すぐにデビューできたわけではありません。コンピュータや物流車両機器の会社で、二十数年をサラリーマンとして過ごしました。もちろんそのあいだも、何かを発信したい、という気持ちを持ち続けていましたが、酒もゴルフもマ

気分転換に熱中したのが、日曜日の「週末カメラマン」で、各地の祭りやモデルの撮影会などにも足を運びました。

四四歳で写真家になる二年ほど前からは、子どもの遊びに興味を覚え、東京下町など都内を中心に一七年ほど撮影を続けました。電子ゲーム機の登場や塾通いが次第に増え、子どもの遊びが街から消えてゆくまで、その経過を追ったものです。

またウズベキスタンをはじめとする中央アジアのシルクロードとアジアの市場、さらにエーゲ海の島々も追い続けているテーマです。アジアの市場については、二五カ国数百カ所を巡って撮影していますし、エーゲ海の島は、観光客がまず訪れることがないような島々まで含めて、

全五二島を撮影制覇しました。

表現者、発信者として生き残るために「まだ誰もやっていないことを撮ったり、書いたりしたい」ということを、常に考えています。

学生の皆さんも、卒業後の人生を豊かにするため、貴重な四年間に専門分野を学ぶと同時に、自分を発見し夢と目標に向かって進んでほしいです。ちなみに私のようなフリーランスには、自己管理能力が重要で、さらに企画力や発想力が最も大切だと感じています。



近著『エーゲ海 青と白が誘う52島』で訪れたサントリーニ島は幻のアトランティスの舞台。

フォトグラファー、 旅行作家 萩野矢慶記

（1961年商経学部卒業）
栃木県出身。83年、サラリーマンを経て写真家に。子どもの遊び、海外紀行をテーマに雑誌への寄稿や写真集を発表。現在までウズベキスタン、ギリシャなど世界58カ国を撮影取材。

海外ツアーにも積極参戦。 ゴルフを通じて、 交流を進めていきたい

プロゴルファー
藤田寛之（1992年経済学部卒業）
福岡県出身。15歳でゴルフを始め推薦入試で専大進学。93年ツアーデビュー。08年、日本ツアーとアジアツアーがジョイントした初海外試合「パインバレー北京オープン」優勝。賞金の一部を中国・四川省大地震の被災地に寄付。



ゴルフ部の岡村誠男部長や 諸先輩からは「礼儀作法、 挨拶、時間厳守」をたたき込ま れました。精神・根性論もあり ましたが、自分の立場をわきま えるといった、社会で生き抜く 力を与えてもらえました。

卒業の翌年にはプロとしてツアーデビューできて、シード権を取るまでに五年を要しましたが、以降は比較的安定した成績を残せてきています。その間、プロ入り後すぐにアジアツアーの予選会に出場、米国PGAツアーにもスポット参戦、海外メジャーの予選や本

戦にも資格がある場合は可能な限り挑戦してきました。海外に出て他国の選手のプレーや文化、ハングリー精神の違いを体感すること、日本に戻ったときに、自分に足りないものが見えてくる。海外体験は自分の成長に結び付いていると感じます。今後は日本とアジアのツアーの交流がより深まり、欧米のように世界で認められるツアーになればいいなと思っています。ゴルフ部後輩のブルも増え、用具メーカーの要職にもOBが揃っています。専大とゴルフ部のさらなる活躍に期待します。

冒険、芸術、 そして 海外勤務に 文化交流 —グローバルな活躍

海洋写真家
武内宏司（1970年経済学部卒業）
愛媛県出身。大学2年からダイビングを始め、海をテーマに写真を撮る。海専門のフォトライブラリー、マリンプレスジャパン代表。沖縄、タヒチ、カリブ海、モルディブといういろいろな海を巡る。



生田寮には2年間いました。大学時代から今の仕事につながる、海関係や撮影のアルバイトに精を出しました。寮の仲間が400人ほどいて、今も付き合いがあります。仕事では世界中の海を巡りますが、あらかじめつくっていくイメージと現場の「絵」が合ったときが快感ですね。

キャンノンロシア LLC カメラ系／マーケティングマネージャー
田中智己（1999年法学部卒業）
福井県出身。99年キャンノン入社。7年間の営業職を経て06年にキャンノンヨーロッパに異動。ロシア・中東・アフリカの新興市場でカメラ系商品の販売を担当。09年よりモスクワにて現職。



在学中から国際的な仕事に漠然と憧れましたが、就職氷河期で挫折も経験。就職課や諸先輩の励ましに助けられました。海外勤務4年目を迎え、真の国際人とは流暢な言葉よりも日本人としての考えや信念の下、国際舞台で外国人と接することのできる日本人である、と強く感じます。

韓国・大田大学校日語日文学科副教授
関丙勳（2001年文学研究科博士後期課程修了）
韓国出身。96～01年、文部省国費留学生。01年5月より韓国湖南大学校、光州大学校等で教員を務め、現在、大田大学校の国際協力研究センター所長、韓国日本語学会学術理事を兼務。



中田武司ゼミでは『伊勢物語』の世界をテーマに、学問の楽しさを学びました。当時から『伊勢物語』や『源氏物語』、『更級日記』など日本の古典に夢中で、いつもポケットに文庫本を忍ばせていました。今後も手綱を緩めず、一生最善を尽くして研究と教育にまい進していきたいです。

中国人、日本人、双方の 文化と考え方の違いを 踏まえて貿易に携わる

大昌貿易行服飾雑貨部、課長代理
王 寛（2004年商学部卒業）
中国出身。中国で縫製工場の責任者を務めた後、来日。00年、31歳で商学部入学。在学中は、留学生会の交流部長も務める。休日には毛筆を持ち、創作に励む。07年、書の日本書展と水墨画の現水展に初出展で入選。



中国では、約二五〇人が働 くアパレル工場の責任者 でした。あるとき、取引先の日 本人から「大学を出ていないの にそんなポジションに就けた の」と驚かれました。悪気はな かったのですが「なんとか 見返してやりたい」と考え、来 日を決意。語学学校を経て、三 一歳で商学部に入りました。

印象に残るのは、留学生会の先輩の紹介で入った飯田謙一ゼミの授業。「人の悲しみがわかる人になれ」「社会人になったらホウレンソウ（報告・連絡・相談）を大切に」という教えは、

今も大切にしています。ゼミでは、新聞記事などを用いて日本企業の海外進出の様子をデータベース化していました。

学外ではアルバイトに精を出しました。中国では人を使う立場だったので、逆のことを経験しておくべきと考え、レストランや清掃のバイトをしました。

こうした学内外の活動を通じて、中国人と日本人の文化や考え方の違いについて体感できたことが、現在の貿易業に生かされています。創立一三〇年を迎える専大には、留学生交流をさらに増やしてほしいと願っています。

海洋冒険家
八幡 暁（1996年経営学部卒業）
東京都出身。卒業後、国内外の海を渡り歩き、海に生きる人々の知恵を学び始める。02年よりシカヤックでのオーストラリアから日本までの人力航海をスタート。前人未到の冒険に挑戦中。



学生時代、たくさん本を読んでは現場に赴き、地球は広く様でないと実感しました。多くの人の出会いを通じて、価値観も多様であることを学べたことが、今の生き方に生かされています。今後は、海を巡る旅から自然と人のかかわりを学び、社会に還元していきたいです。

弁護士、ニューヨーク州弁護士
（現在、登録手続中）
相羽利昭（1990年法学部卒業）
東京都出身。三宅・今井・池田法律事務所パートナー弁護士。08年米国ニューヨーク州司法試験合格。Zeichner Ellman & Krause LLP（http://www.zeklaw.com）にて研修を行なう。



弁護士になってから英語を勉強し直し、07年に米国のロースクールに留学。昨年ニューヨーク州の司法試験にも合格しました。何事も諦めずに目標に向かって努力することを梅本吉彦教授や当時の司法試験研究室（正法会）の諸先輩方から教えていただいたおかげだと思います。

在エルサルバドル日本大使館専門調査員
佐藤香子（2003年経済学研究科修士課程修了）
岩手県出身。経済学研究科博士後期課程に進学後の3年目、休学して約2年間、外務省専門調査員として在パナマ日本大使館に勤務。その後、在エルサルバドル大使館に赴任、現在に至る。



狐崎己ゼミでは途上国の経済発展に関する理論、事例研究に熱心しました。現地を自分の目・耳・口でフィールドワークしましたが、これは国際経済学科の先生方に身をもって教わったことです。現在はエルサルバドルで同国の政治経済や中米情勢の調査・研究に従事しています。

一葉式いけ花 家元嗣
粕谷尚弘（2003年経営学部卒業）
東京都出身。一葉式いけ花家元の次男に生まれ、02年日本いけばな芸術協会新世代展出品。04年渡米し工業デザインを学ぶ。北米、南アフリカなど国内外でのいけ花ライブ・教授活動を展開。



経営学の蔡 錫（チェ・インソク）先生から学んだ行動科学的な観点からのリーダーシップ論は、今、いけ花の次期家元として修養中の私にとっては大きな礎です。どんな時代でも「名」にとらわれず、「質実」を重視する、そんな専修人らしさを、いつまでも大切にしたいと思います。